

個人レポート

『新古今和歌集』二番歌・後鳥羽院詠の考察

大塚 千聖

一 はじめに

はるたつころをよみ侍りける

摂政太政大臣

みよしのは山もかすみて白雪のふりにしさに春はきにけり

春のはじめの歌

太上天皇

ほのぼのと春こそ空にきにけらし天の香具山霞たなびく

(春上・一、二)

『新古今和歌集』の春上はこの二首から始まる。時の摂政太政大臣・藤原良経と後鳥羽院の詠作である。『新古今和歌集』は、一二〇一年(建仁元年)十一月に下された後鳥羽院の院宣によって編纂が始まり、一二〇五年(元久二年)に一応の完成を迎えた。一応というのは、元久二年に勅撰和歌集史上初となる竟宴が行われたのちも、切り継ぎと呼ばれる改訂作業が続いたためである。

後鳥羽院(一一八〇～一二三九)は、和歌所の再興や「千五百番歌合」を催し、承久の乱後、隠岐に流されてからは、歌論書『後鳥羽院御口伝』を記し、『新古今和歌集』のさらなる改訂を行うなど、和歌に執心した治天の君であった。しかし、院が詠進を始めたと言われるのは院政を始め

暫くしてからのことで、在位期の詠作は知られていない。辻浩和氏は「中世においては「諸道の興隆」が帝王の理想像とされていた」と指摘しており、後鳥羽院の詠作に「帝王」としての意識が込められている可能性は極めて高いように思われる。つまり、この二番歌にも何かしらの政治的な意図が込められているのではないか。そこで本稿では、二番歌そのものを解釈しながら、後鳥羽院が込めた可能性がある政治的な意図があるかどうかを探ってみたい。

二 「ほのぼのと」はどこにかかるか

二番歌の解釈をするときに、考えなくてはならないのは、初句の「ほのぼのと」がどこにかかってくるのかである。本居宣長著の注釈『美濃の家づと』と、宣長の弟子である石原正明著の注釈『尾張の家づと』では、「ほのぼのと」が最後の「霞たなびく」にかかると理解されている。しかし、窪田空穂氏は、他の文の一句にかかるとは構造上不自然であるとし、「ほのぼのと春こそ空に来にけらし」が一文であると指摘されている。⁽¹⁾久保田淳氏もその説を肯定しており、現在では「ほのぼのと」は「春こそ空に来にけらし」にかかっていると理解するのが一般化しているようである。⁽²⁾では、構造上不自然なことが何故通説とされていたのか。こ

のことについて窪田氏は「美濃がそう解したのは、この歌を本歌である万葉集の歌と同じ心のもと認めようとして、迎えて解したがためと思われる」と分析している。万葉集と同じ心というのは「霞がたなびいた↓春が来た（喜び）」という理解の仕方のようなところだが、当該歌は「空を見て春が来たことを認める（喜び）」↓霞もたなびいている」と理解されるもので、窪田氏は、この変化のつけ方を「新古今的」と評している。「ほのぼのと」と「春」を併せて詠んだ用例は、当該歌以前では、以下の三首のみであった。

1 ほのぼのと明石の浜を見渡せば春の浪わけ出づる舟の帆

〔源順集〕・八・春

源順

2 ほのぼのと霞たりけん和歌の浦の春の景色はいかが見てこし

〔行尊大僧正集〕・十二

公円阿闍梨

3 ほのぼのと春の浪路にたなびくや霞の船のつなでなるらん

源光行

〔百詠和歌〕第七・二三八・居処部・船

「ほのぼのと」と「春」を同時に詠みこむことは、後鳥羽院以降、用例が増えてくるのだが、それ以前は珍しい形であったようだ。

続いて、これらの三首の「ほのぼのと」がどの部分にかかっているのかを一つずつ見てみる。「ほのぼのと」には、夜明けのほんやりと明るいさまという意味があるため、1は「明石の浜」の「明」には「夜が明ける」が掛けられており、「ほのぼのと明石の浜で夜が明け」、浜から辺

りを見渡した結果、春の穏やかな波を分けるように進む船の帆が見える、という歌の解釈が出来る。「ほのぼのと」が「明石」にかかる例は、『古今集』の仮名序にも挿入歌として取られており、人麻呂詠と伝えられる『古今集』巻九・四〇九・羈旅「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞ思ふ」が代表的で、広く知られる読みぶりであったことがわかる。

次に2についてだが、この歌がある歌群は、行尊が十六歳の秋に修行に出た道中の一連の出来事を歌うものであった。当該歌は和歌の浦の後にした行尊に、公円阿闍梨が和歌の浦の春の景色がいかなるものであったかを問う内容である。この「ほのぼのと」は「霞たりけん」にかかっている。

最後に3だが、『百詠和歌』は初唐に流行した単題詩に先行が仮名注と和歌一首を添えた句題和歌集で、当該歌の詞書は「羽客乗霞至 羽客は仙人也、むらさきの霞の舟、あをきかすみのふねにのれり」だ。「霞の船」は仙人が乗るものと考えられる。「ほのぼのと」は歌の構造からみて「たなびくや」にかかっていると考えるのが自然で、上三句を「ほのぼのと春の波に霞がたなびいている」という解釈が出来る。また、1と同じく春の浪と船が詠みこまれている。

以上から、後鳥羽院詠以前の「ほのぼのと」と「春」が詠みこまれている歌は、「明石の浜」「和歌の浦」などの水辺の風景を歌っているものが多く、それに伴い「浪」や「船」の語が使用される傾向にあることがわかった。さらに、「ほのぼのと」が修飾している語だが、1は「明けていく空の様子」を、1以外では「霞」となり、そのような先例から、後鳥羽院詠でも「ほのぼのと」が「霞たなびく」にかかるという文法的には不自然な説が浸透したのだろう。後鳥羽院もこれらの先例を見てい

たはずで、実際、「ほのほのと春が空に來たらしい」という気付きの前提にあるのは、空に何かを見つけたということになるだろうし、その「何か」は、歌の内容からたなびく霞であると考えることが出来る。しかし、ここで重要なのは実景ではなく、後鳥羽院が頭の中に描いていたイメージだろう。後鳥羽院は何故、ほのほのとたなびく霞を見て春を知るのではなく、ほのほのと春が來たらしいと春を予言し、その証拠としてたなびく霞を挙げたのだろうか。後鳥羽院詠の気付きの順番には、天の香具山が季節の変化のいちはやく兆す山としてとらえられており、かつ、季節の運行をいちはやく把握することも為政者であることの資質と無関係ではないという考え方が関係しているのではないか。

三 出典・本歌・参考歌

二番歌の初出は『後鳥羽院御集』で、元久二年三月に日吉社に奉納された三十首和歌の春歌中の一首で、他出には『定家八代抄』『新三十六人撰』がある。本歌とされる和歌は、『萬葉集』の柿本人麻呂詠の

春雑歌

久方之 天芳山 此夕 霞霏 春立下

(久方の天芳山この夕霞たなびく春立つらしも)

(巻第十・一八二・春雑歌)
が指摘され、参考歌としては『秋篠月清集』藤原良経詠の

春廿首

ひさかたの雲居に春の立ちぬれば空にぞ霞む天の香具山

(院初度百首・七〇〇)

が指摘されている⁽⁷⁾。この良経詠は、後鳥羽院が初めて主催した百首歌である「院初度百首」の巻頭歌で、立春に寄せて後鳥羽院時代を言祝ぐ歌に仕立てたと考えられている⁽⁸⁾。

また、田中喜美香氏は『萬葉集』舒明天皇の国見歌

天皇登二香具山一望レ国之時御製歌

山常庭 村山有等 取与呂布 天乃香具山 騰立 国見乎為者 国

原波 煙立竜 海原波 加万目立多都 怜・国曾 蜻嶋 八間跡能

国者

(やまとはは むらやまあれど とりよろふ あめのかぐやま
のほりたち くにみをすれば くにはらは けぶりたちたつ
うなはらは かまめたちたつ うましくにぞ あきづしま
やまとのくには)

(巻第一・二・雑歌)

を念頭に置いて後鳥羽院の「ほのほのと」歌が詠まれたと指摘している⁽⁹⁾。「国見」という行為は、「大王や地方の首長が高い所から国の地勢や人民の生活状態などを望み見ること。国を支配する者の支配の象徴的行⁽¹⁰⁾為」で、後鳥羽院の為政者という意識に重なりあう。これを踏まえて、後鳥羽院詠を「国見」という視点から考えてみたい。そのために、まず、国見の場所である「天の香具山」を探っていく。

四 天の香具山の持つ政治性

後鳥羽院には五首の香具山の歌があり、そのうち四首は霞の中の香具山を歌った歌である⁽¹¹⁾。季節の到来を香具山から読み取る先例には、『百人一首』にもとられている有名な、持統天皇の

天皇御製歌

春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有 天之香來山
(春過ぎて夏來るらし白妙の衣乾したり天の香具山)

(卷第一・二十八・雜歌)

が存在し、この歌は語句の相違があるが『新古今和歌集』の夏部にも入集している。田中氏は持統天皇詠が後鳥羽院詠の発想の直接的根拠であると指摘しているが、そもそも『新古今和歌集』以前、天の香具山はどのように詠まれてきたものであるのだろうか。『萬葉集』及び勅撰集に絞ってその用例をあたり、天の香具山が帯びている政治性について考察を進める。

まず、天の香具山の用例が多く見られたのは、『萬葉集』で、新古今時代に規範とされた『古今和歌集』にはその用例を見つけることが出来なかった。

そして、『萬葉集』の中に、天の香具山が詠みこまれた歌を五首見つけることが出来たが、うち三首は、先に述べた卷第一・二・雜歌「大和には 群山ありと とりよろふ 天の香具山 登りたち……」(舒明天皇の国見歌)、卷第一・二十八・雜歌「春過ぎて 夏來るらし 白妙の衣乾したり 天の香具山」(持統天皇)、卷第十・一八二・春雜歌「久方の天芳山この夕霞たなびく春立つらしも」(人麻呂詠)であった。舒明天皇の国見歌は、国見という行為の場所が天の香具山となっており、極めて政治性が高い歌であることは既に述べた。持統天皇詠は、季節の到来を発見する歌で、これもやはりただの叙景歌にとどまらず政治性を帯びていると考えるのが妥当だろう。人麻呂詠は、後鳥羽院詠の本歌となった歌で、歌っている景色が非常に似通っている。また、卷第十春の

雜歌の巻頭歌で、続く七首からなる歌群はすべて人麻呂詠とされている。いずれも季節の自然が詠みこまれた新体歌群で、「霞」をキーワードに、ある場所で霞がたなびいており、それを見ることで春の訪れを告げる内容だ。⁽¹³⁾しかし、ここでの春の訪れが政治的意図と関わっているとは少し考えにくい。と言うのも、一つ後の一八一三番歌「巻向の 檜原に立てる 春霞 おほにし思はば なづみ来めやも」は、霞に人間の思い(恋愛感情)が込められた相聞歌で、一八一四番以降の歌は、一首に一つの地名が詠みこまれ、その地に春が来たということを歌う実景を詠んだ歌だと考えられるからだ。そのため、後鳥羽院詠がこの人麻呂詠を本歌としていることは、景色の類似性から明らかだが、あくまで歌の中の景色を参考にしてのみで、この人麻呂詠の香具山に政治性を読み取ることは難しいと考える。

その他、『萬葉集』で詠まれている天の香具山を含む歌は、卷第三・二五七・雜歌「天降りつく 天の芳来山 霞立つ 春に至れば 松風に 池波立ちて 桜花 木のくれ茂に 沖辺には 鴨妻喚ばひ 辺つ方に あぢむら騒ぎ ももしきの 大宮人の まかり出て 遊ぶ船には 梶棹も 無くてさぶしも 漕ぐ人なしに」(鴨君足人香具山歌一首并短歌)と、卷第七・一〇九六・雜歌「昔者の 事は知らぬを 我見ても 久し くなりぬ 天の香具山」である。

二五七の「天降りつく……」詠は、反歌二首と本歌と考えられている長歌が続き、さらに左注には「右今案、遷二都寧樂一之後伶レ旧作二此歌一歟(右、今案ふるに、都を寧樂に遷したる後に旧りぬるを怜びてこの歌を作るか)」の一文が添えられていた。左注を併せて考えると、この歌では、奈良が旧都となり大宮人がいなくなった様子が、美しいまま変わらない自然と対比させられていると解釈できる。初句と二句の「天の

香具山が空から降ってきた」というのは、『伊予国風土記』（逸文）にある香具山が天から降り二つに分かれ、一方は伊予の天山になったという伝承が踏まえられており、⁽¹⁴⁾天の香具山では春が来ると霞がたなびくということを定義するように始まり、以下、春の風景が畳みかけるように詠まれている。歌から直接的な為政者（帝）の影はうかがえないが、「旧都」という政治の中心地であった事実を踏まえたとえでの詠作だと考えられ、この歌の中で香具山は政治性を帯びていると考えられるだろう。

一〇九六の「昔者の…」は、「詠レ山」という一連の歌群の中に位置する。『萬葉集』の巻第七は一般に作者不明の歌が収められていて、この歌の作者も不明だ。また、巻第七は年代ごとに纏められたわけではなく、類聚的に纏められていると考えられるため、この歌がどの時代に詠まれたかも不明である。初句の「昔者の事」というのは、二五七番歌同様、『伊予国風土記』を踏まえた伝説のことだ。香具山を眺めている主体「我」が誰なのかを『萬葉集（和歌文学大系）』では香具山近くに住む人と推測しているが、やはり推測の域を出ない。しかし、歌を詠じた主体が時の天皇や朝廷に仕える官人であるなら、香具山をはじめとする山々に何かの意図が込められている可能性は、大いにあるだろう。

『萬葉集』以後『新古今和歌集』以前の勅撰集で天の香具山を詠んでいたのは、『詞花和歌集』の崇徳院詠

新院位におはしましける時、中宮、春の女房はかなき事によりて挑み交はして、上達部、上の男どもを方分きて、ことに付けつ、歌をよみ交はしけるに、上、中宮の御方に渡らせ給ひけるを、方人に取りたてまつりてなん、さるべきこと言ひつかはせ、とおのおの申しければ、よみてつかはしける

久方の天の香具山いづる日も我かたにこそ光さすらめ

（『詞花和歌集』巻十三・三七九・雑下）

のみであった。詞書から、勝負事の際に崇徳院が中宮方の女房に立って詠んだものだとわかる。「香具山の方から上る日が我が方（中宮方）に差す」つまり、帝の力が日の光に重ねられているのである。香具山が神聖視され、帝の権力と結びついていることが読み取れ、ここでの天の香具山には政治性があると言える。

以上『萬葉集』と『詞花和歌集』の「天の香具山」の用例を確認した。結果、天の香具山には①伝説から派生した神話性と②為政者に関わる政治性の二つの要素が重要視されていたことが判明した。とりわけ天皇の天の香具山詠には、②の政治的要素が必ず絡んでいる。やはり、後鳥羽院がこの要素を意識していない可能性は低いと思われる。田中氏が指摘したように、この歌には『萬葉集』巻第一・二・雑歌「大和には…」のように国見の考え方、後鳥羽院の為政者としての意識が働いていると言えるのではないか。更に、為政者と季節の移り変わりの関係から見ると、『萬葉集』巻第一・二十八・雑歌「春過ぎて…」も詠作の念頭に置かれていただろう。

五 藤原良経歌との繋がり

冒頭で触れたように、後鳥羽院詠は『新古今和歌集』の二番目の歌で、巻頭歌ではない。巻頭歌の作者・藤原良経は、建久二年以後に後鳥羽院からの信任を得て摂政となった人物である。和歌所の寄人筆頭で、『新古今和歌集』編纂にも深く関与しており、仮名序の執筆も行っている。『後鳥羽院御口伝』の良経評「故摂政は、たけをむねとして、諸方を兼ねたりき。いかにぞやと見る詞のなさ、歌ごとに由あるさま、不可思議なり

き。百首などのあまりに地歌もなく見えしこそ、かへりては難ともいひつべかりしか。秀歌のあまり多くて、両三首などは書きのせがたし」から、歌に対する評価も極めて高かったことが知られている。

「天の香具山」が詠みこまれており、かつ、後鳥羽院が絶対に目にしていたであろう良経の歌が一首ある。『秋篠月清集』院初度百首・七〇〇「ひさかたの雲居に春の立ちぬれば空にぞ霞む天の香具山」だ。この良経詠が二番歌の参考歌として指摘されていることは既に述べた通りだが、ここでは、後鳥羽院の歌の政治性を二つの良経詠との照応という面から考えていきたい。

まず、巻頭歌と二番歌の繋がりを見ていく。巻頭歌で詠まれた「吉野」は、現在の奈良県吉野郡吉野町周囲をさし、二番歌で詠まれた「天の香具山」は奈良県橿原市にある大和三山のうちの一つで、巻頭歌と二番歌には、地理の共通点がある。また、巻頭歌の「ふりにし里」は奈良を表すが、古い都（吉野京）への天武天皇・持統天皇の行幸に供奉した廷臣の作品が、『萬葉集』や『懷風藻』に数多く収められている（注15）。治承四年（一一八〇）平重衡の軍勢による東大寺、及び興福寺の焼き討ちで南都は荒廃した。焼き討ちの翌年から着手された南都復興事業の東大寺大仏殿の再建は、上棟式が建久元年（一一九〇）十月十九日で、落慶法要である東大寺供養が建久六年（一一九五）二月と『新古今和歌集』編纂の時期とちょうど重なっている。そのため後鳥羽院政時代の旧都への関心は、高かったと推測できよう。¹⁶

このようなことを踏まえると、巻頭歌と二番歌にそれぞれ詠まれている「南都復興」事業に関連を持つ「古都・吉野に訪れた春」「古都の山で時の為政者とかかわりをもつ天の香具山に訪れた春」は意図して並べられたものと考えて良いだろう。

二番歌の初出である『日吉三十首』を見ると、この「ほのほのと」詠は春の二番目の歌で、一つ前の「春来ぬと聞きつる山のかひなれや霞て過ぐる峰の松風」は、春が来たのだという気付きを歌っており、『新古今集』巻頭の良経詠と共通している。後鳥羽院の『日吉三十首』の一番歌と、良経の巻頭歌の両方を受け、二番歌では春の訪れの証拠として「天の香具山の霞」を挙げているのだ。つまり、臣下・良経が、雪が「降っていた」場所に春がきた「のだなあ」（＝雪は止んでいる）と歌い、それに対して時の為政者・後鳥羽院が、春は空から来たらしい（＝雪がやんでいる）「その証拠に」香具山に霞がたなびいている、と返しているのである。この流れは、臣下の気付きを肯定する為政者という唱和の配列と考えられ、先ほど述べたように、「季節の運行をいち早く把握すること、為政者であることの資質と無関係ではない」のだとしたら、この配列は重要であると考えられる。天の香具山のもつ意味もますます生きてくるだろう。

次に、参考歌との関連性についてみていきたい。初句「ひさかたの」に導かれる「雲居」は、ただ単に雲の意味を持つだけでなく後鳥羽院政も指しており、良経は、立春を香具山という為政者の山を寿ぎながら歌っている。ここで注目したいのが、春の訪れへの目線である。良経は春の訪れを、「雲居に春が来ていることが見て取れる」という「証拠」から、「天の香具山が空に霞んで見える」という春の訪れの「結果」を挙げている。一方の後鳥羽院は、まず春が来たらしいという「結果」を告げ、そのあとに「香具山に霞がたなびいている」という春の訪れの「証拠」を挙げている。結果と証拠の順番が逆であるにも関わらず、詞が詠みこまれている順番は同じで、しかも、『萬葉集』以降、詠まれることが少なくなっていた「天の香具山」が詠みこまれているという共通点も

ある。後鳥羽院が『萬葉集』に見える天皇詠の「天の香具山」歌を念頭に、「ほのぼのと」詠を歌ったことは間違いないだろう。しかし、「天の香具山」という語の選択、さらに、天の香具山のもつ政治性を新古今時代に再び和歌に詠みこむ、という発想の源となったのは、この良経の参考歌だと言えるのではないか。新古今以前に天の香具山を歌った歌は、決して数は多くはないが存在している。しかし、先に見たように後鳥羽院ら歌人が必ず目を通していたと考えられる勅撰集では『詞花和歌集』以外になかったようなのである。後鳥羽院詠に良経の「ひさかたの…」詠がもたらした影響は、かなり大きかったと考える。また良経の「天の香具山」という発想には、彼自身が南都復興事業の当事者として、先に述べた東大寺供養の報告に伊勢に奉幣したことなども背景にあるのではないか。

六 おわりに

以上、『新古今和歌集』二番歌・後鳥羽院詠「ほのぼのと…」を、語句に注目しながら政治性を検討した。

後鳥羽院は、この「ほのぼのと…」詠を、竟冥目前の一応完成していたと思われる『新古今和歌集』に切り入れたと言われている。院のこの歌への思いの強さが窺え、何らかの強い意図が込められていることを示唆するエピソードである。

「天の香具山」は、古来より季節の変化をいち早く告げる山と見なされており、為政者、特に天皇にとっては国見をするための場として機能してきたが、その用例は『古今和歌集』以後の勅撰集の歌には『詞花和歌集』を除いて確認できなかった。しかし、当時の南都復興事業による南都への関心、臣下・良経の「ひさかたの…」詠の影響を受け、後鳥羽院は「天の香具山」と「国見」という発想を得たのではないか。つまり、「天

の香具山」の語に後鳥羽院の「帝王」としての意識、政治性が込められているのだろう。

隠岐に入配流後、後鳥羽院は二番歌を自身の手によって切り出してしまふ。憶測の域を出ないが、配流先で政治的実権を失った状況から説明がつくかもしれない。この点については今後の課題としたい。

注

- (1) 辻浩和「院政期における後鳥羽芸能の位置―後白河芸能との関係を中心に―」(『史學雜誌』第一一六号・二〇〇七年七月)
- (2) 窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』(東京堂出版・一九七四年)
- (3) 久保田淳『新古今和歌集全注釈』(角川書店・二〇一一年)
- (4) 『角川古語大辞典』
- (5) 『歌ことば歌枕大辞典』「天の香具山」の項
- (6) 『新古今和歌集全注釈』(久保田淳著)、『完本新古今和歌集評釈』(窪田空穂著)、『新日本古典文学大系』
- (7) 『新古今和歌集全注釈』『新古今和歌集上』(いずれも久保田淳著)
- (8) 『和歌文学大系 60 秋篠月清集』解説
- (9) 田中喜美香「後鳥羽院の香具山」(『国語と国文学』第五十四号・一九七七年2月)
- (10) 「くに・み【国見】」・『日本国語大辞典』JapanKnowledge. <http://japanknowledge.com>. (参照2015-09-16)
- (11) 前掲田中論文
- (12) 前掲田中論文
- (13) 『萬葉集 三(和歌文学大系3)』巻末解説
- (14) 『歌ことば歌枕大辞典』「天の香具山」の項
- (15) 注3に同じ
- (16) 村尾誠一「南都復興と和歌」(『文学』第十一号・二〇一〇年1月)

(17) 谷知子校注『秋篠月清集(和歌文学大系)』注

参考文献一覧

北村季吟『八代集抄』(『新古今古注集成』近世旧注編3・笠間書院・一九九七年)
本居宣長『美濃の家づと』(『新古今古注集成』近世新中編1・笠間書院・二〇〇四年)

石原正明『尾張廻家苞』(『新古今古注集成』近世新中編2・笠間書院・二〇一四年)

窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』(東京堂出版・一九七四年)

田中喜美香『後鳥羽院の香具山』(『国語と国文学』第五十四号・一九九七年二月)
田中裕・赤瀬信吾『新古今和歌集』(『新日本古典文学大系』・岩波書店・一九九二年)

寺島恒世『後鳥羽院御集』(『和歌文学大系24』・明治書院・一九九七年)

稲岡耕二『萬葉集一』(『和歌文学大系1』・明治書院・一九九七年)

稲岡耕二『萬葉集二』(『和歌文学大系2』・明治書院・二〇〇二年)

稲岡耕二『萬葉集三』(『和歌文学大系3』・明治書院・二〇〇六年)

榊原照枝『新古今和歌集』の天皇歌―巻頭・巻軸歌を中心に後鳥羽院の撰集
意図との関わりにおいて―(『語文』第百十四号・二〇〇二年十二月)

丸谷才一『後鳥羽院』第二版(筑摩書房・二〇〇四年)

久保田淳『新古今和歌集』(角川ソフィア文庫・二〇〇七年)

久保田淳『新古今和歌集全注釈』(角川書店・二〇一一年)

村尾誠一『南都復興と和歌』(『文学』第十一号・二〇一〇年一月)

田淵句美子『新古今集 後鳥羽院と定家の時代』(角川学芸出版・二〇一〇年)

五味文彦『後鳥羽上皇 新古今和歌集は何を語るか』(角川選書・二〇一二年)

谷知子校注『秋篠月清集』(『和歌文学大系60』・明治書院・二〇一三年)

辻浩和『院政期における後鳥羽芸能の位置―後白河芸能との関係を中心に―』(『史学雑誌』第一一六号・二〇〇七年七月)